津山城百聞録

～椿高下の小豆研～

かつて津山にいた妖怪というと、入道坂の名の由来となった「見越し入道」や「カッパのごんご」が知られていますが、ほかにはなかなか思い付きません。現在では、妖怪たちの伝承自体が消えてしまっているのです。しかし、江戸時代の津山には、さまざまな妖怪や変化がいたようです。

江戸時代の中ごろに成立したと考えられる『山陽道美作記 巻之八』には「津山王代より化物の住所七不思議之事」という項目があって、津山とその近辺に棲むさまざまな妖怪や変化、あるいは不思議な出来事が記録されています。表題では七不思議としていますが、実際には多数の事例が載せられており、この資料は最近、岡山県立博物館の『研究報告第25号』に紹介されたので、活字で読むことができます。

その中では、津山の城下町に棲む妖怪たちのうち「樫原前の変化」「八子村入口の野襖」「望月坂の槌」「四十間蔵の前の茶立」「小豆研」「坂口の幽霊」「見越し入道」などが紹介されております。

これらは、すべてが妖怪というわけではないのですが、江戸時代の津山の人々にとっては、恐ろしいながらも興味深い怪奇現象として、さまざまにうわさされていたと考えられます。

さて、この中で名前がよく知られているという点では、小豆研が一番でしょう。著名な漫画家の描く小豆研の姿が思い浮かびますが、この小豆研、津山では椿高下に出没していました。

椿高下には、松平藩の家老を勤めていた安藤家の下屋敷があり、そこに小豆研が出るというのです。下屋敷というのは別邸のことで、森藩の時代には、衆楽園の近辺に広い敷地の下屋敷を持つ者もいましたが、松平藩の時代になると、それらの多くは開墾されて田畑となります。しかし、松平藩においても、一部の重臣たちは下屋敷を与えられており、安藤家は椿高下に所有していました。場所は、現在の津山高校の向かい側にある、百周年記念館の付近になります。

『山陽道美作記』には「此処に小豆研という化物あり」とあるのですが、その姿を見た者がいたかどうかは分かりません。ただ「夜更て通れハこしこしとあつきを研音の聞こゆ」とあるのみです。

かつては当たり前だった、そこ此処の小さな暗闇。妖怪たちは、今どこに…。

▲津山城下町絵図（色枠が安藤家下屋敷）

つやま広報 1月号
平成20年 2008 639号
TSUYAMA CITY Public Relations Magazine

編集・発行（毎月10日発行）
津山市企画部市長公室（市役所３階）
〒708-8501 岡山県津山市山北520番地
TEL 0868-23-2111(代) FAX 0868-32-2152
Eメール kouhou@city.tsuyama.okayama.jp

☆広報つやまはホームページで閲覧できます。
http://www.city.tsuyama.okayama.jp/

つ・ぶ・や・き 編集室

特集の新春対談では色々と考えさせられる話が聞けました。紙面にすべてを掲載できず、皆さんには少ししかお伝えできませんでしたが、今後の紙面作りなどで活かせるように頑張ります。今年もよろしくお願いします。(&)

今年は子年です。私にとって一番身近なネズミは、コンピュータのマウス。最近では進化し、しっぽが無いものも出回っています。これにあやかって、広報の能力を進化とは言えないまでも、少しでも向上させていきたいです。(2)

新年明けましておめでとうございます。今年こそ「またスポーツを始めるぞ」という決意を込めて、仕事半分、元日から「津山元旦走り初め大会」に参加しました。ほかにも始めたいことはあるんですが、まずは運動不足解消です！(和)

11月中のひとの動き

人口	110,547人（前月比＋44）		
男	52,751人（同＋9）		
女	57,796人（同＋35）		
世帯	43,692世帯（同＋20）		
転入	273人	転出	213人
出生	71人	死亡	87人

（12月1日現在）

PRINTED WITH SOY INK R100
広報つやまは、環境保護のため古紙配合率100%再生紙、大豆油インキを使用しています。読み終えた後はリサイクルにご協力ください